

「日々の理科」(第1604号) 2018 (H30), 11, 29

「栗のひこばえ、稲のひこばえ」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

雑木林や森の中で、根元から折れた木や、人工的に切られた切り株の根元から、新しく小さな枝が何本も伸びているのを見ることがある。これは「ひこばえ」と呼ばれるものだ。



これは私の山荘の裏庭にあった、クリの木の切り株である。秋になると大量の山栗のイガを落とすのだが、それを狙って、イノシシの大群が押し寄せるので、思い切って2年前に切ってしまったのだ。しばらくは、切り口から樹液が染み出していたが、翌春に根元から新しい芽が出始め、今は1メートル近くになった。



まだ枝は細いが、ついている葉は紛れもなく、クリの葉である。葉の大きさも、普通のクリの木と変わらない。

「ひこばえ」は漢字では「蘗」と書く。実は「孫生え(ひこばえ)」という意味だ。もとの幹に対し、小さな孫が生まれるというのが語源である。



ひこばえは、樹木だけでなく、草本(そうほん)にも見られる。有名なのがイネのひこばえ「稲孫(ひつじ)」である。今の時期、収穫が終わった水田で、高い確率で見ることができる。(高崎市倉渕町)



イネの切り口に、ほぼ例外なく緑の芽(再生イネ)が見える。よく見ると、刈られた切り口からではなく、根元(土)から直接生えていることがわかる。実は、この新しい芽は、条件が良いともう一度穂をつけるまでに育つという。(ただし収量は少ない)かつて日本でも温暖な地方では、2回目の収穫が行われていたらしい。東南アジアでは、現在でも再生イネを育てて、収穫する農法が続いているという。